

なぜ幸福な人生は有意味な人生とイコールではないのか？

—「人生の意味」の分析哲学研究—

法政大学大学院 国際文化研究科 修士課程 1年

20Q8109 上田瑞季

はじめに

イギリスの思想家ジョン・スチュアート・ミル（1806～1873）は、功利主義の主唱者ジェレミ・ベンサム¹の著作を読んで以来、生涯の目的を意識し始めた。彼は世界の改革者になろうと夢見ていたが、自身の幸福をこの目的と完全に一致させなければならぬと考えていた。世間では全面的な改善が行われ、ミル自身も他人とともに、社会の改善に役立っているとされた。それゆえ彼の生活は充実していた。

ところが、ミルが20歳になったころ、彼は自身に次のような問いを発することになった。「かりにおまえの生涯の目的が全部実現されたと考えて見よ。おまえの待望する制度や思想の変革が全部、今この瞬間に完全に成就できたと考えて見よ。これはおまえにとって果して大きな喜びであり幸福であろうか？」²。この問いに対して、彼が出した答えは「否！」であり、彼の生涯を支えてきた全基盤がガラガラと崩れ落ちることとなった。「私の全幸福はこの目標を絶えず追いつづけることにあるはずだ。ところがこの目標が一朝にして魅力を失ってしまった。して見ればそこに至る手段に、どうしてふたたび興味を感じることができよう。もう私の生きる目的は何一つ残っていないように見えた？」と、彼は自伝に残している。

ミルのエピソードから、私たちは重要な示唆を手に入れることができる。ミルは「幸福」と「人生の目的（意味）」を一致させなければならぬと考えていた。それゆえ生涯の目的を達成したら、自分自身は幸福ではないと気づいたのである。ここから一つの問いが浮かび上がってくる。それは「幸福な人生と有意味な人生はイコールではないのか」という一般的な見解とは相反する問いである。なぜなら、通常は「幸福な人生 = 有意味な人生^{イコール}」とされているからだ。

たしかに幸福を追求することに「人生の意味」を見出す人もいれば、幸福が手に入らないことを「無意味な人生」と考える人もいる。その意味で、私たちの中には「幸福な人生」と「有意味な人生」とを同じもの、あるいは等しいものと考えている人が多い。だからといって、「幸福な人生」と「有意味な人生」が、同じもの、あるいは等しいものと言えるだろうか。

そこで本稿の目的は、「幸福」と「人生の意味」の関係を哲学的に整理し、「なぜ幸福な人生は有意味な人生とイコールではないのか」という問いに答えることである。筆者が念頭に置いている本稿の意義は、この問いを明らかにすることで、「人生の意味」に関する通説にメスを入れるだけでなく、「人生の意味」の哲学に関する一考察を行うことにある。

結論を先取りして言えば、「幸福」は主観あるいは客観のいずれかの立場で成り立つのに対し、「人生の意味」は主観・客観のみならず、自己と他者との相互的な水準でも成り立つ。それゆえ、両者は必ずしもイコール（等値）の関係にはない。より強く言うならば、両者は同じもの（同一物）であることはあり得ない。

そもそも「人生の意味」をめぐる問いは、20世紀末から現在に至るまで、英米系の分析哲学の分野で新たな形で議論されてきた。分析哲学が何を意味するかに関しては現在でも多く議論されているが、ここでは哲学的な問題を厳密に、かつ明晰な議論を通して解決しようとする分野のことを指す。換言すれば、言葉の意味や主張の根拠をはっきりさせること、論理的に穴のない論証を積み重ねることを目指している³。その際、分析哲学における「人生の意味」の議論では、従

¹ 朱牟田夏雄訳『ミル自伝』、岩波書店、1960年、p.120。

² 朱牟田夏雄訳、同書、p.120。

³ 鈴木生郎、秋葉剛史、谷川卓、倉田剛『現代形而上学 分析哲学が問う、人・因果・存在の謎』、新曜社、2014年、pp.12-13 参照。

来の偉人伝や人生論に見られるような「具体的な人生の内実」をそれほど重視しない。この分野の特徴は、「人生の意味」という問題がどのように語られてきたかを問うことによって、「人生の意味」という問題の客観的妥当性を検討することにある。したがって本稿も分析哲学的に考察することで、先の問いを検討する。

1. 哲学における「幸福」の三つの理論

「幸福」は人間にとって重大な関心事として、様々な形で問題とされてきた。しかし本節では、「どうしたら幸福になれるか」といった方法的な問いは検討しない。あくまで「幸福」の理論を比較・分析することを目的とする。

イギリスの現代哲学者デレク・パーフィットは、『理由と人格』の補論「ある者の生を最もうまく行かせるもの」の中で、「快楽主義説（Hedonistic Theories）」、「欲求充足説（Desire-Fulfillment Theories）」、「客観的リスト説（Objective List Theories）」の三分類を提示した。ここで指摘しておきたいのは、パーフィット自身はこの三つの理論を「幸福」の理論として提唱してはいないことである。むしろ彼は「自己利益に関する理論」と呼んでいた。ところが、彼の分析と考察をきっかけにして、現代哲学においては幸福（happiness）や福利（well-being）、利益（interest）をこの枠組みで考えることが一般的になった⁴。本稿はパーフィットの真意を追求する場ではないので、あくまで定説に従ってパーフィットによる三分類を簡潔に説明することから、「幸福」という主題に触れていくことにしよう。また「幸福」の理論は、幸福がどのように主観的あるいは客観的に影響を与えるかということにはあまり触れられていない。

第一に、快楽主義説では、幸福とは主観的な感情の問題であり⁵、快楽が（肉体的のみならず精神的な快楽を含めて）幸福を形成すると見なす⁶。それゆえ幸福であるか否かは「主観的」な感覚や感情に依存し、本人が幸福に感じていれば幸福になる。その意味で、快楽主義説による「幸福」の理論では、幸福を感じる個人の主観的な感覚や感情が重要であって、必ずしも同一の「幸福」を他者と共有する必要はない。この点から、快楽主義説には幸福の相互性がないと言えるだろう。

第二に、欲求充足説では、幸福とは私たちが欲するものを獲得することによって得られる。そのため、欲求の内容は本人の主観的欲求に委ねられる。つまり喜び（あるいは不快）の量に関わらず、欲求の達成が人の幸福に貢献する。欲求充足説では、欲求が達成されることで得られる喜びや快は、あくまで個人的なものであり、その喜びや快は他者がなくても十分獲得できるものである。つまり、自己の欲求の達成が、同時に他者を幸福にすることはない。したがって、欲求充足説も自己の幸福が他者の幸福をもたらしたり、その逆があったりするようなことは考えられていない。結果的に、欲求充足説も基本的には個人主義的・主観主義的な幸福観を持っていると言えるだろう。

第三に、客観的リスト説では、幸福とは主観的な感覚や感情の外部にあって、現実世界の中で真に客観的に価値があるもののリストによって規定される。例えば、仕事での功績、友情、病気や痛みからの自由、物質的豊かさ、美、教育、愛、知識、善意などがリストに含まれる。この場合、幸福はあくまで客観的なリストによって規定されており、ある個人がそれを欲しようと思わなくても、価値あるものや価値のないものがあらかじめ決まっている。この説では、個人個人が相互に影響しあって、それぞれが幸福になるということは視野に入っていない。したがって客観的リスト説も、自己と他者の相互性は確保されてはいない。

以上から、これら三つの「幸福」の理論は主観主義と客観主義の二つに大きく分類できるが、本稿の第2節で検討す

⁴ この点については、次の『スタンフォード大学哲学百科辞典（WEB版）』（<https://plato.stanford.edu/entries/happiness/>）、江口（2015）、青山（2016）の記述を参照のこと。

⁵ 幸福における三つの理論、快楽主義説、欲求充足説、客観的リスト説に関しては、次の資料を参照のこと（<https://www.authentic happiness.sas.upenn.edu/ja/content/happiness-three-traditional-theories>）。

⁶ 青山拓央『幸福はなぜ哲学の問題になるのか』、太田出版、2016年、p.15 参照。

るように、三つの理論が「相互主観的（intersubjective）」な性質を持つことはない。というのも、快樂主義説と欲求充足説は個人の実感や欲求に重点が置かれることから、個人主義的・主観主義的な立場をとっているため、他者との相互性は成り立ちにくい。また客観的リスト説は個人の感覚から離れた万人に共通のリストを掲げることから、客観主義的な立場をとっているが、他者との相互主観的な関係は想定されていない。したがって、少なくともパーフィットが分類したこれらの「幸福」の理論では、どの立場をとったとしても「相互主観的」な観点が欠けていると言えるだろう⁷。

次に「人生の意味」について分析哲学の文脈でどのように語られてきたかを見てみよう。

2. 哲学における「人生の意味」の理論

「人生の意味」に関しても、多くの思想家たちが様々な形で語ってきた。特に「人生の意味」を分析哲学的に体系的に考察したことで有名なのが、南アフリカの哲学者サディアス・メッツである。彼は従来の「人生の意味」に関する哲学的な議論の論点をクリアにし、このテーマの見取り図を作成した功績を残している。本節では、メッツの「人生の意味」論を整理したのちに、「意味」の〈意味⁸〉について考察する。

2-1. メッツによる「人生の意味」の理論

メッツは、「人生の意味」の理論を「超自然主義（supernaturalism）」と「自然主義（naturalism）」の二つの立場に分ける。超自然主義は、「人生の意味」を神や魂などスピリチュアルな領域との関係性において把握する立場である。一方、自然主義は、「人生の意味」が物質に本来備わる性質から構成されているとする幅広い考えのことである⁹。

さらにメッツは、自然主義を「主観主義（subjectivism）」と「客観主義（objectivism）」の二つに分ける。主観主義とは、人生を有意味にするものは主観に依存するという立場である。メッツによれば、主観主義は「命題的態度（propositional attitudes）」という「何らかの事態に関する欲求、感情、目標などの心的状態」を獲得することによってのみ、人生が意味を持つという考え方である¹⁰。この場合、主観主義における主観（＝主語）とは命題的態度によって表象できると考えられている。命題的態度とは、英米哲学系の「心の哲学」において用いられる「心的状態」の記述方法の一つである。例えば「私は〇〇と信じる（I believe that...）」や「彼は〇〇を欲する（He wants that...）」のような「that節（that clauses）」による命題の形をとることができる。つまり主観主義では、欲求や感情などの心的状態を獲得することによって、人生は〈有意味〉になると考える。

それに対して、客観主義は「人生の意味」はある程度客観的に決まるとする立場である。メッツ曰く、客観主義では、ある状態が〈有意味〉になるのは、その状態が少なくとも部分的に本来備わっている物理的本性に基いているため、主観的に〈有意味〉であると信じられたり、欲されたり、好まれたり、求められたりするかどうかとは独立している¹¹。

メッツ自身は客観主義の立場をとっており、自身の理論を「基盤主義理論（the fundamentality theory）¹²」として定式化する。メッツによれば、人間にとって根本的に価値を持つもの（真、善、美）に理性を持って貢献すればするほど、「人生の意味」は増大するが、それらに向かわなければ向かわないほど、「人生の意味」は減ぜられるのである。しかもメッツのいう真・善・美という理想的価値は、私たちの人生に左右されず、経験とは別次元に実在すると考えられている。森

⁷ もちろん「幸福」の理論はこれら三つだけとは限らない。したがって、パーフィットが取り上げた「幸福」の理論以外の理論については、「相互主観的」な幸福が存在する可能性は否定できない。しかし、本稿では「幸福」の別の理論を検討することが目的ではないので、これ以上の指摘は差し控えたい。

⁸ 「意味」は言語的意味を表わし、〈意味〉は言語的意味以外の、あるいは言語的意味以上を表わす際に用いる。

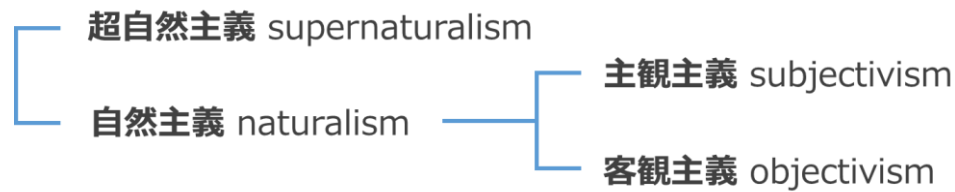
⁹ Cf. Thaddeus Metz, *Meaning in life: An Analytic Study*, Oxford University Press, 2014, p.164.

¹⁰ Thaddeus Metz, *op.cit.*, p.164.

¹¹ Cf. Thaddeus Metz, *op.cit.*, p.180.

¹² Cf. Thaddeus Metz, *op.cit.*, pp.219-239.

岡正博の説にならえば、メッツの「人生の意味」論は、以下のような図で表すことができる¹³。



2-2. 〈意味〉の相互主観的性質

ところで、「人生の意味」や「有意味な人生」という表現における〈意味〉は、通常の言葉の意味とは明らかに異なる。私たちが「人生の意味とは何か」と問うとき、そこで問われているのは「人生」という言葉の意味ではなく、言語的意味を理解した上で的人生そのものの〈意味〉である。例えば、「この企画書は意味がない」という際の〈意味〉も、企画書の内容を言語的な意味で理解した上で、内容そのものに〈意味〉がない（＝重要ではない）と判断している。

それゆえ「人生の意味」の〈意味〉には、言語的意味〈以外〉の、あるいは言語的意味〈以上〉の〈意味〉が含まれている。ここでは佐藤透に即して、「人生の意味」における〈意味〉を「連関意味¹⁴」と呼ぶ。「連関意味」とは、人生全体を俯瞰するメタレベルから「人生そのものに〈意味〉がある」という判断を下すときの〈意味〉を指す。

しかし「連関意味」の〈意味〉は、それだけだろうか。ある人にとって〈有意味〉だと思われていた人生が、実は他者にとっては〈無意味〉だったということがある。反対に、ある人の主観にとって〈無意味〉だと思われていた人生が、別の他者にとって、実は〈有意味〉だったということもある。この場合、〈有意味〉〈無意味〉という「連関意味」は、個人の主観によってのみ規定されているわけではなく、常にすでに〈他者にとって〉という視点を含んでいる。つまり「連関意味」としての〈有意味・無意味〉は、必然的に主観的な立場を超える「脱-主観化¹⁵」の傾向がある。したがって「連関意味」は、個人の主観的な性質と、いわゆる客観的な性質とは異なる「相互主観的¹⁶」な性質を内在させていると考えられる。この「相互主観的」とは、単独の主観を超えて複数の主観による共通理解が成立する次元のことを指す¹⁷。

「相互主観的」と「脱-主観化」という概念の関係について、佐藤透の例に基づいて簡単に説明してみよう。ある若い漁師は、朝焼けの日は大漁になると信じていた。しかし他の漁師は朝焼けの日は不漁であると経験的に知っている。若い漁師にとって朝焼けの日に多くの網を仕掛けることは〈意味〉のあることだが、他の漁師にとっては〈意味〉のないことだった。若い漁師にその旨を伝えたところ、若い漁師の認識は他の漁師たちと共通のものとなった。こうした共通理解に基づいて、若い漁師は自らの行為が〈無意味〉だったと悟る。

このような事態を「連関意味」の「脱-主観化」と呼ぶことができる。「連関意味」とは、一人の主観だけで成立することも可能ではあるが、多くの場合は個人の了解が別の了解によって破棄され、その別の了解が共有されるか、あるいは個人の了解が他の人に共有されることによって成り立つ。こうして「相互主観的」な共通理解が構成される。以上のように、「人生の意味」を問うとき、自己と他者（＝他の自己）との間に相互的な関係が成り立つ場合に、本稿では「相互主

¹³ 森岡正博「人生の意味」は客観的か：T・メッツの所説をめぐって 生命の哲学の構築に向けて（7）、早稲田大学現代死生学研究 所『現代生命哲学研究』第4号、2015年、p.83。

¹⁴ 佐藤透『「人生の意味」の哲学 時と意味の探求』、春秋社、2012年、p.22。

¹⁵ 佐藤透、同書、p.135。

¹⁶ 佐藤透、同書、pp.127-128。

¹⁷ 佐藤透、同書、pp.133-135 参照。

観的」という言葉を用いることにしたい。

3. なぜ幸福な人生は有意味な人生とイコールではないのか？

これまで「幸福」や「人生の意味」の理論について、それぞれ分析してきた。最後に「なぜ幸福な人生は有意味な人生とイコールではないのか」について答えていこう。ただし本稿で取り上げる「人生」は、誕生から死に至るまでの全体的な生の時間的拡がりのことを指し、いわゆる「生命」や「生活」という具体的な内実については触れていない。

そのために仮説として「幸福な人生であれば、有意味な人生である」という言説を検証する。まず「幸福な人生である」と「有意味な人生である」とは、まったく異なる事態を説明していることがわかる。というのも、メッツも言うように、「〈有意味〉ではないが幸福な人生」が成り立つと同様に、「〈有意味〉であるが幸福ではない人生」も成り立つからだ¹⁸。他人に迷惑や害を与えているにもかかわらず私腹を肥やし続ける人生は主観的には幸福感に満ち溢れているかもしれないが、他人からは〈有意味〉な人生とは思われまいだろう。一方で他者の命を救うために自己犠牲を払った人生はたとえ本人は幸福な人生には思えなかったとしても、救われた他者からは〈有意味〉な人生だと評価されるだろう。このように私たちの経験から考察してみても、「幸福な人生」と「有意味な人生」がイコールの関係になることはない。

次に分析哲学における「幸福」と「人生の意味」の諸理論を比較してみたい。まず、それぞれの理論における「客観主義」が指す立場の違いに注意が必要である。「幸福」の客観的リスト説では、価値リストが現実世界での実現可能・経験可能な価値として、個々人の「幸福」を具体的に規定する。それに対して、「人生の意味」のメッツの客観主義では、神のように高次にある理念的価値として、個々人の「人生の意味」の目的となる。つまり、両者はまったく異なる客観主義を唱えている。したがって、同じ「客観」という言葉を用いながら、「客観」という言葉が指している意味内容は、異なっているとわざるを得ない。

より重要なのは、「人生の意味」の理論では、「連関意味」が成り立つ「相互主観的」な立場を主張できる点である。というのも、現象学の創始者エドムント・フッサールに基づく限り、基本的に〈意味〉は「相互主観的」に構成されているからだ。しかし「幸福」の理論においては、現時点では「相互主観的な立場」が考えられるとは言い難い。フッサールが語る「相互主観的」という性質は、「幸福」を成り立たせる条件を明らかにするためには適切ではないからだ。また、すでに第1節でパーフィットの「幸福」の理論を検討したように、「幸福」は主観だけで成り立つことができる。たとえ自己と他者で幸福が共有されることがあったとしても、自己と他者の互いの幸福が互いに影響しあって幸福になりうるという「幸福」の相互性を確認できるかは今のところ断定できない。

以上のことから、「なぜ幸福な人生は有意味な人生とイコールではないのか」という問いに対して、「**人生の意味**」の理論では**相互主観的な立場が考えられるのに対し、「幸福」の理論では現時点では相互主観的な立場が想定できないからだと回答できる**。これまでの分析哲学的な考察によって、「有意味な人生」と「幸福な人生」は形式的には別個なものとして扱わなければならないことが明らかになった。

一般的に「幸福な人生」は主観的な感情から切り離すことが難しく、自分が幸福感を抱いたからといって他者がまったく同じように感じるとは言えない。さらに強調しておくならば、主観的な幸福を追求した結果、「自分さえ幸福であれば、それでいい」という自己満足的な幸福感に陥ってしまう場合もある。一方で「有意味な人生」はある主観にとって〈有意味〉であるのみならず、その〈意味〉が他者によって支えられる「連関意味」であると考えられる。それゆえ、ある個人の「有意味な人生」は、その個人の主観の観点だけでは語り切れず、「連関意味」を担う他者によって支えられ、その他者にとっても〈有意味〉でありうる。つまり「有意味な人生」とは、個人の主観的な「幸福な人生」よりも広く、他者との関係性を含んだ「連関意味」までを包括する、より大きい内実を持ったものだと考えられる。

¹⁸ Cf. Thaddeus Metz, *op.cit.*, p.5.

これまでの考察から明らかになったように、本稿の目的である「なぜ幸福な人生は有意味な人生とはイコールではないのか」という問いに対して、形式的な分析哲学的考察から一定の回答が得られた。

4. おわりに

「人生の意味」の哲学全体を踏まえた哲学的解明としては、問題点が残されている。そこで今後の課題として、大きく次の三点は避けて通れない。

一点目として、メツの「人生の意味」理論に「相互主観主義 (intersubjectivism)」なるものを組み込めるかを検討することである。本稿の結論として、「人生の意味」の理論を新しく展開するために「相互主観的な立場」を提案する段階にとどまっている。そのため今後は「人生の意味」の哲学の一つの説として主張できるかを検討していきたい。その際、フッサールが提唱する「intersubjective」と「intersubjectivity」という概念を、「人生の意味」の哲学の中で、再考していかなければならない。というのも、この概念の訳し方や考え方によって、「人生の意味」の哲学を考察するにあたり、今後の方向性が大きく変わりうるからだ¹⁹。

二点目として、本当に「幸福」の理論には「相互主観的な立場」を考慮することができないのかという問題である。すでに触れてきたように、本稿はあくまでパーフィットの提唱した三つの「幸福」の理論に従って考察してきた。それゆえパーフィットが唱えた理論以外にも、「幸福」の理論がありうるはずだ。たしかに「幸福」の概念を明らかにするためには、「相互主観的」という概念は必須ではないが、いまだ検討する余地がある。なぜなら、次の三点目との関係を踏まえて、経験的なレベルから考えれば、私たちの人生は「幸福」を「相互主観的」に考える可能性も否定できないからだ。

三点目として、「有意味な人生」を具体的に考えた場合、その人生の内実（内容）がどのように〈意味〉があるかについての哲学的な考察が引き続き要請される。これまでの考察から明らかなように、「幸福な人生」と「有意味な人生」とは、分析哲学的に言えば、形式的には別個のものとして考えなければならない。しかし「人生の意味」を哲学的かつ包括的に考察するためには、必然的に実質的で経験的なレベルで「人生の意味」の〈意味〉を考察しなければならない。

しかも私たちの人生の経験的で日常的なレベルでは、「幸福な人生」と「有意味な人生」の両者は重なる部分がありうる。なぜなら、ある人が「幸福を手に入れることができれば、自らの人生は有意味だ」と思うような場合、その人は「幸福」と「人生の意味」の両者を経験的に重ねているということがありうるからだ。この点が「幸福な人生は有意味な人生とイコールである」という通説の根拠になっている点であろう。したがって、「人生の意味」の哲学研究を進めるにあたり避けて通れないのは、具体的かつ個人的な人生の〈意味〉と個人の主観的な幸福感とがどのように関係しているかを哲学的に考察することである。

それと同時に、二点目との関係から、ある人にとって「幸福な人生」が、その人以外の他者にとっても「幸福な人生」となりうるものが、実際の経験的な次元でもありうるのかという問題がある。「人生の意味」の哲学において、あらためて「幸福な人生」が実質的に「相互主観的」でありうるかという問いを検討する必要がある。端的に言えば、パーフィットが分類した「幸福」の理論以外にも幸福について考えることは可能である。そうであるならば、幸福が他者と共有されることや、自己の幸福が他者の幸福であり他者の幸福が自己の幸福でもあるような「幸福」の相互性が成り立つと考えることはできる。

筆者としては、「人生の意味」の哲学において「幸福」の理論的考察は重要であることを認めるに吝かではない。しかし、

¹⁹ フッサールの「intersubjective」あるいは「intersubjectivity」という概念は、フッサール現象学研究の文脈では、一般的に「間主観的」あるいは「間主観性」と訳されているが、「相互主観的」あるいは「相互主観性」とも訳される場合も少なくない。またフッサールの著作の訳者の中には、「諸主観共同的」あるいは「諸主観共同性」（渡邊二郎）や「共同主観的」あるいは「共同主観性」（廣松渉）と訳すこともある。それゆえ、「intersubjective」あるいは「intersubjectivity」における接頭辞「inter-」をどのように訳すことが「人生の意味」の哲学にとって適切であるかは、まだ検討の余地がある。

筆者の構想する「人生の意味」の哲学研究にとって緊急かつ重要な問題は、〈意味〉の「相互主観主義」がどのように確立できるかである。それゆえ、これらの課題にすべて応えることは極めて困難であり、筆者の現在の能力を超えているため、あくまで指摘するにとどめておきたい。

ちなみに冒頭で紹介したミルは、「幸福な人生」と「有意味な人生」に悩み苦しんだが、葛藤の末、ささやかな一つの光を感じることができた。彼は、ある著作をきっかけに人生に関する新しい理論に導かれ、それまで重要視できなかった内的教養について目を向けるようになったという。ここに来て、「人生の意味」の分析哲学は、ミルの思想にやっと追いついたとも言えるかもしれない。

参考文献

- Goetz, Stewart and Seachris, Joshua W., *What Is This Thing Called The Meaning of Life*, Routledge, 2020.
- Metz, Thaddeus, *Meaning in life: An Analytic Study*, Oxford University Press, 2014.
- Parfit, Derek, *Reasons and Persons*, Oxford University Press, 1987. (デレク・パーフィット『理由と人格—非人格性の倫理へ』森村進訳、勁草書房、1998年。)
- Seligman, Martin E. P. and Royzman, (Ed.) *Happiness: The Three Traditional Theories*. 2003. (2020年11月25日閲覧 <https://www.authentic happiness.sas.upenn.edu/ja/content/happiness-three-traditional-theories>)。
- 青山拓央『幸福はなぜ哲学の問題になるのか』、太田出版、2016年。
- 植村玄輝、八重樫徹、吉川孝編著『現代現象学 経験から始まる哲学入門』、新曜社、2017年。
- 江口聡「幸福についての主観説と客観説、そして幸福の心理学」、哲学若手研究者フォーラム『哲学の探求』第42号、2015年、pp.24-42。
- 江口聡「幸福の心理学研究に対して倫理学者はどう反応するべきか」、京都女子大学大学院現代社会研究科紀要『現代社会研究科論集』第8号、2014年、pp.75-89。
- 久木田水生「人生の意味についての言説はどのような言語ゲームなのか」、日本科学哲学会第50回年次大会ワークショップ「分析哲学／現代形而上学で「人生の意味」や「死」について「語る」ことはできるのか」、2017年11月19日、東京大学 (2020年11月25日閲覧 <http://www.is.nagoya-u.ac.jp/dep-ss/phil/kukita/works/Language-game-of-meaning-in-life-20171119.pdf>)。
- 久木田水生「分析実存主義とは何か：分析哲学の進歩、あるいは退廃」、名古屋哲学会、2015年12月19日、南山大学 (2020年11月25日閲覧 <http://www.info.human.nagoya-u.ac.jp/lab/phil/kukita/works/WhatIsAnalyticExistentialism-rev2.pdf>)。
- 佐藤透『人生の意味の哲学 時と意味の探求』、春秋社、2012年。
- 篠澤和久、松浦明宏、信太光郎、文景楠『はじめての論理学—伝わるロジカル・ライティング入門』、有斐閣ストウディア、2020年。
- 鈴木生郎、秋葉剛史、谷川卓、倉田剛『現代形而上学 分析哲学が問う、人・因果・存在の謎』、新曜社、2014年。
- 福間聡「人生の意味と幸福——労働の終わりにおいて」、高崎経済大学地域政策学会『地域政策研究』第20巻、2017年、pp.15-33。
- 森岡正博「「人生の意味」は客観的か—T・メッツの所説をめぐって 生命の哲学の構築に向けて (7)」、早稲田大学現代死生学研究所『現代生命哲学研究』第4号、2015年、pp.82-97。
- 森岡正博「「人生の意味」の哲学」、『現代思想 12月臨時増刊』vol.45-21、2017年、pp.180-185。

参考資料

- Hybron, Dan, *Happiness*, Stanford Encyclopedia of Philosophy, 2020. (2020年11月25日閲覧 <https://plato.stanford.edu/entries/happiness/>)。
- Mets, Thaddeus, *The Meaning of Life*, Stanford Encyclopedia of Philosophy, 2013. (2020年11月25日閲覧 <https://plato.stanford.edu/entries/life-meaning/>)。